

万葉集におけるツツの用法について

— 覚書として —

島 山 真 一

1 はじめに

本研究は、万葉集における助詞ツツの用法を考察し、従来指摘されてこなかった上代におけるツツの特質を明らかにしようとするものである。

万葉集に観察されるツツは、広い意味での同時性を表現する接続助詞だが、(1)前接する動詞によって表現される動作や変化結果が持続すること、(2)同一主体によってその動作・変化が反復されること、(3)異なった主体によってその動作・変化繰り返し返されること、といったアスペクチュアルな意味を持っている(山口 一九八〇、野村 一九八九)。

現代日本語(共通語)におけるツツのアスペクチュアルな意味については、副島(二〇〇七)や竹内(二〇一一)がツツと存在動詞アルが結びついたシツツアルという形式に注目して分析を行っており、現

代日本語のアスペクト体系として、副島(二〇〇七)はスル・シテイル・シツツアル・シテアルの四項対立を、竹内(二〇一一)はスル・シツツアル・シテイルの変則的三項対立を見出している。

本研究は、万葉集で観察されるツツのアスペクチュアルなふるまいを分析し、従来指摘されてこなかった「変化の進行」の用法が観察されることを報告する。

2 先行研究

『時代別国語大辞典上代編』は、ツツの用法として、「継続・反復」をたて、万葉集から次のような用例をあげている(上代語辞典編集委員会 一九六七)。

- (1) a. 梅の花 散らくはいづく しかすがに こ
の城の山に雪は降りつつ(八二三)

b. あり通ひ 見つつしのはめ この布勢の海

を（四一八七）

(1a) は、降雪という動作の継続を表現しているが、

(1b) は、反復の接辞アリが前接した「通ひ」が文脈中にあるため、「通う」という動作の継続というよりはむしろ「通う」という動作が反復して行われたことを示していると考えられる。

上代・中古のデータをもとに、時代別国語大辞典

上代編の記述を精緻化したものが、山田（一九八〇）である。山田（一九八〇：二〇ページ～二一ページ）は、

上代・中古におけるツツを次の四つの用法を持つ助詞として分析している^{二〇}。

(2) a. 動作の継続

狩はねむごろにもせで、酒を飲みつつ、や

まと歌にかかれけり（伊勢物語）

b. 状態の持続

朝戸出の 君が足結を 濡らす露原 早く

起き 出でつつ我も 裳の裾濡らさな（万

葉集 二二三五七）

c. 反復

草枕 旅にしばしば かくのみや 君を遣

りつつ 我が恋ひ居らむ（万葉集 三九三

六）

d. 複数主体による動作の繰り返し

人々おどろきて、めでたうおぼゆるに忍ば
れで、あいなう起きあつつ鼻を忍びやかに

かみわたす（源氏 須磨）

山田（一九八〇）が上代・中古のデータから見出

したツツは、すべて万葉集においても観察される。「動作の継続」については(1a)に挙例していることから省略し、「複数主体による動作の繰り返し」のみ挙例する^{二一}。

(3) うつせみの 世の人なれば 大君の 命恐み

天離る 鄙治めにと 朝鳥の 朝立ちしつつ

群鳥の 群立ち去なば 留まり居て（二七八五）

上述の山田（一九八〇）の分析は時代別国語大辞典の記述を一步進めたもので非常に重要なものであり、分類についても疑うべき点はない。しかし、ツツが後接する動詞の意味カテゴリーと用法の関係が検討されておらず、鈴木（一九九二）以降蓄積され

てきた古代日本語に関するアスペクト研究との接続が困難となっている。

次節において、とくに動詞の意味カテゴリーと強い連関を持つツツの「動作の継続」用法と「結果状態の持続」用法を検討し、加えて、従来指摘されてこなかったツツのアスペクチュアルな用法の存在を指摘する。

3 ツツの用法の特質

本節では、まずツツの「動作の継続」用法と「結果状態の持続」用法を検討し、それに続いて、管見の限り先行研究で言及されていないツツの用法について述べる。

3・1 ツツと動詞の意味カテゴリー

本節では、ツツの「動作の継続」用法と「状態の持続」用法を順に検討する。

まず、「動作の継続」用法であるが、次のような知覚・思考や自然現象を表すものが多い。

(4) a. 雲だにも 著しくし立たば 心遣り 見つ

つも居らむ 直に逢ふまでに (二四五二)

b. 人となる ことは難きを わくらばに な

れる我が身は 死にも生きも 君がまにま

と 思ひつつ ありし間に うつせみの

世の人なれば 大君の 命恐み 天離る

鄙納めにと (一七八五)

c. 心なき 秋の月夜の 物思ふと 眼の寝ら

えぬに 照りつつもとな (二二二六)

(4c)には「照る」をあげたが、自然現象の継続を示すツツの例としては、(1a)に挙例した「降る」にツツに下接する例がある程度まとまった数観察できた(10例)。また、感情の表出を表現する動詞「泣く」「嘆く」とむすびついたものもいくつか見られた。

これらの例は、意志性が無く動作性が低いものであるが、動作性が高いと認定できる動詞にツツが結びつき、「動作の継続」を表現している場合も観察できた。次の例を見てみよう。

(5) a. 黒木取り 草も刈りつつ 仕へめど いそ

しきわけと 褒めむともあらず (七八〇)

b. 我がやどの 梅の下枝に 遊びつつ うぐ

いす鳴くも 散らまく惜しみ(八四二)

c. 垂姫の 浦を漕ぎつつ 今日の日は 楽し

く遊べ 言ひ継ぎにせむ(四〇四七)

d. 斧取りて 丹生の檜山の 木伐り来て 筏

に作り ま梶貫き 磯漕ぎ廻つつ 鳥伝ひ

見れども飽かず み吉野の 滝もとどろに

落つる白波(二二三二)

(7) a. 岩畳 恐き山と 知りつつも 我は恋ふる

か 並ならなくに(一三三一)

b. 人目守る 君がまにまに 我さへに 早く

起きつつ 裳の裾濡れぬ(二五六三)

c. 松の花 花数にしも 我が背子が 思へら

なくにもとな咲きつつ(三九四二)

d. 秋の雨に 濡れつつ居れば 賤しけど 我

妹がやどし 思ほゆるかも(一五七三)

しかし、用例は上述のものに尽きているようであり、動作性の高い動詞はツツが結びつきにくいと言える。

続いて「状態の持続」用法について述べる。状態の持続として分類できるものとして目につくのは静止状態への変化を表現する動詞「待つ」(5例)、「居る」(3例)である。

(6) a. 鴨山の 岩根しまける 我をかも 知らに

と妹が 待ちつつあるらむ(二二三)

b. 巻向の 穴師の山に 雲居つつ 雨は降れ

ども 濡れつつそ来し(三二二六)

その他の例としては、次のようなものが見られた。

「静止状態への変化」以外で「状態の持続」を意味する例としては、(7d)に挙例した「濡る」とツツのが連接が最も多く観察された(5例)。

本節においてここまで議論してきたツツの「状態の持続」用法は、主体変化することによって出現する結果状態の持続を意味していたが、ツツは「客体変化結果状態の持続」を表現することも可能である。次の例を見てみよう。

(8) 落ゆる実は 玉に貫きつつ 手に巻きて 見れ

ども飽かず(四一一)

この例では、「落ちた実を玉にして緒を作り、その緒を手をまいたところ、いつまで見ても飽きない」

という状況が表現されており、「玉に貫きつつ」は「玉にしておいて」という客体変化結果状態の維持を意味している。

次の例は、確実とは言えないものの「客体変化結果状態の維持」と解釈できる例である。

(9) 衣こそば それ破れぬれば 継ぎつつも また

も合ふといへ 玉こそば 緒の絶えぬれば く

くりつつ またも合うといへ (三三三三〇)

この例における「継ぎつつも」、「くくりつつ」は、「(破れたら) また継を当てておき」、「(緒が切れたら)

くくっておけば」と解釈でき、客体変化結果状態の維持とも分析できる。ただし、この例の場合、仮定条件の中に入っているという解釈が優勢で、ツツはむしろ反復もしくは繰り返しとして解釈すべきとも思われ、確実な例とは言えない。

3・2 ツツと変化の進行・パーフェクト

ここまで先行研究で指摘されてきた用法と動詞分類の関係について見てきたが、本節では、先行研究で指摘されていないと考えられる「変化の進行」用

法と「パーフェクト」用法が観察できることを述べたい。^四

副島(二〇〇七)、竹内(二〇一一)が指摘するように現代日本語におけるシツツアルは、「変化の進行」を示すことが可能である。次の例を見てみよう。

(10) 扉が開きつつある。

この例は、「扉」が「開く」という変化を開始したものの、依然として「開ききつて」おらず、「開く」という変化が進行しているという状況を描写するものである。

(10)に例示されるような用法は、万葉集におけるツツにも観察できる。次の例を見てみよう。

(11) ほととぎす 鳴き渡りぬと 告ぐれども 我聞

き継がず 花は過ぎつつ (四一九四)

本例の結句では、「花の盛りが過ぎつつある」ことが描写されており、「花の盛りが過ぎていく」という変化が進行中であることが示されていると解釈できる。これは、現代日本語のシツツアルにおける「変化の進行」と同じ用法とみなすことができるであろう。同様の用法と解釈できると考えられる例として

は、次のようなものがある（東歌ではあるが）。

(12) 赤駒が 門出をしつつ 出でかてに せしを見

立てし 家の児らはも（三五三四）

通常、「門出す」という位置変化は瞬間的なものであるが、(12)においては、なかなか出立できないという状況が描写されており、その変化に時間的な幅が認められる。このため、本例におけるツツは「門出す」という変化が進行中であり、その変化が進行しているプロセスと「出でかてに」というプロセスがオーバーラップしていることを表現していると解釈できる。よって、この例も「変化の進行」と解釈することができると思われる。

次の例も、「変化の進行」と解釈できる例である。

(13) 春されば 水草の上に 置く霜の 消えつつも

我は 恋ひ渡るかも（一九〇八）

本例は、「春において水草の上に発生した霜が消えるように、私の心も消え入りつつありながらも、私は恋しつづけている」という解釈になると思われ、「消え入る」という変化が進行中であることを示しているように思われる。

続いて、いわゆるパーフェクトをツツが表現していると考えられる例を見てみたい。

現代日本語において、パーフェクトは典型的にはシテイル形式によって表現される。次の例を見てみよう。

(14) a. すでに私は業務レポートを書いています。

b. その話は聞いています。

(14a)は、「過去のある時点で業務レポートを書ききっており、その結果が発話時に影響を与えていること（例えば、他の従業員よりも先に帰宅することが可能になっているなど）」を示している。同様に、(13b)は、「過去のある時点で、話を聞いた」という出来事が発生し、その聴取の結果、発話時に「聞いたことがある」という経験が存在していることを示している。これらの例に見られるシテイル形式の用法は、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」を表現しており、これをパーフェクトと呼ぶ（工藤一九九五：99ページ）。

万葉集に見られるツツには、このパーフェクトを

表現しているとみなせるものがある。次の例を見てみよう。

(15) a. 遠くあれば わびてもあるを 里近く あ

りと聞きつつ 見ぬがすべなさ (七七五)

b. 松浦瀉 佐用姫の児が 領巾振りし 山の

名のみや 聞きつつ居らむ (八六八)

c. ありありて 後も逢はむと 言のみを 堅

く言ひつつ 逢ふとはなしに (三一一三)

(15a)では「近くにいと聞いた」にも関わらず「逢うことができない」という逆接的な関係が表現されている。これは、「近くにいと聞いたこと」によって「逢うことができる」という期待が形成され、その期待が発話時にまで効力を及ぼしていることによつて「逆接」の解釈が生み出されていると言える。したがつて、(15a)のツツはパーフェクトを表現していることとみなすことができる。この状況は(15b)においても同じである。

(15c)についても、「聞いたことから導かれる効力」ではなく、「後で逢おう」という約束が成立したにも関わらず「逢うことがない」という逆接であり、(15a、

(15b)と同じく言語活動の効力が発話時に残存していることが示されている。

このように、言語活動を表現する「言う」、「聞く」といった動詞にツツが下接した場合、パーフェクトの読みが発生すると言える。

また、句と句の連接の点で言えばツツは、パーフェクト読みが得られた場合、「逆接」の関係を表現しているといえる。これは、現代日本語のナガラと同じ状況である(和田 1998)。

次の例を見てみよう。

(16) 田中は、明日必ず借金を返済すると言いながら、返さなかつた。

(16)は、(15c)と同様に約束の効力が発話時に残存しているにも関わらず、その約束行為が履行されなかつたという出来事が描写されており、ナガラの逆接解釈が発生している。したがつて、万葉集におけるツツは、現代日本語のナガラと対応していると言える。

4 おわりに

本研究では、万葉集に見られる動詞と接続するツ

ツの分析を行い、従来の分類の精密化を行った。あわせて、先行研究で指摘されてこなかったと思われる「変化の進行」用法およびパーフェクト用法をツツが持っているという観察を述べた。

注

- 一 挙例についても、時代別国語大辞典上代編にならったが、翻字については新日本古典文学全集『万葉集一〜四』（小学館）によった。以後、本論文で使用される万葉集の例文は、新日本古典文学全集『万葉集一〜四』（小学館）から採ることとする。
- 二 注一と同様に、挙例についても山田（一九八〇）にならった。
- 三 これ以降、提示するデータは万葉集からのみであるため、歌番号のみ記載する。
- 四 一九八〇年代までの国語学的研究は、「変化」を「動作」と同視している可能性があることに注意せよ。

参考文献

工藤真由美（一九九五）『アスペクト・テンス体系とテキスト―現代日本語の時間の表現』、ひつ

じ書房

上代語辞典編修委員会（編）（一九六七）、『時代別

国語大辞典上代編』、三省堂

鈴木泰（一九九二）『古代日本語動詞のテンス・ア

スペクト―源氏物語の分析』、ひつじ書房

副島健作（二〇〇七）『日本語のアスペクト体系の

研究』、ひつじ書房

竹内史郎（二〇一一）『近代語のアスペクト表現に

ついての一考察―ツツアルを中心に―』、青木

博史（編）『日本語文法の歴史と変化』、くろし

お出版 一五一―一七三

野村剛史（一九八九）『上代語のヌとツについて』、

『国語学』一五八、一―四

山口莞二（一九八〇）『て』『つ』『ながら』考』、

『国語国文』四九卷三号、一―一六

和田礼子（一九九八）『逆接か同時進行かを決定す

るナガラ節のアスペクトについて』、『日本語教

育』九七、九四―一〇五